

# 社会学の貧困

堤 史 朗

## (一)

社会学の歩みは、社会学が多くの問題点を抱えているとしても、それはまだ若い学問であるという理由で容赦される事に甘んじてきた歩みでもある。Robert K. Merton による Alfred N. Whitehead のアフォリズム「その創立者のことを忘れかねている科学は、もう駄目である」(Robert, K. Merton, *Social Theory and Social Structure*, 1957)との警告を有しながらも、社会学は創立者たちによる学問としての性格規定の呪縛から解き放されないできた。今日の社会学が、〈paradigm〉の革新の直中にある、と言われる状況において尚そうである。確かに社会学は、Thomas S. Kuhn のいう「通常科学」として成立するために、同学者たちの間で一般に認められ共通して使用される規則、規準といったものをつくりあげ、「一定期間、一定の過去の科学的業績を受け入れ、それを基礎として進行させる研究を意味している」(Thomas S. Kuhn *The Structure of Scientific Revolutions*, 1962) 標準的なモデルを与える 〈paradigm〉の構築に腐心してきた。そして、第二次世界大戦後に、社会学は「構造一機能分析」という〈paradigm〉を手に入れることに成功した。が1960年代半ば以降、「社会」学としての社会学にとって、その対象世界である〈現実〉そのものが資本主義経済体制の構造的な動揺を体制的〈危機〉として内在化させるに及んで、社会学

は、その拠って立つ枠組の弱点を露呈し、その全般的な組み替えを要求するさまざまな運動の渦の真っ直中をさ迷いはじめた。いわく「社会学の社会学」、「批判的 sociology」、「ラディカル sociology」、「現象学的 sociology」、「エスノメソドロジー」、「象徴的相互作用論」などの〈counter paradigm〉の競合しあう状態がそれである。しかし〈counter paradigm〉が競合しあう状態にあって、社会学理論がその理論的混迷と摸索の状態を脱しえないままであっても、「構造一機能分析」は、尚社会学の流れを枠付けている。〈現実〉の危機に対して有効な学問的対応を果たせないままにいるにもかかわらず、……である。

〈現実〉の危機に十全に対応することが出来ないままにある現代の社会学を〈危機〉の段階にある学問のひとつとして仮借ないまでに徹底的な批判を加えたのが、Alvin W. Gouldner, *The Coming Crisis of Western Sociology*, 1970., である。

Gouldner は、本書 Chapter 9 “The Coming Crisis of Western Sociology, I: The Shift toward the Welfare State” を「機能主義理論および、もっと一般的には、いわゆる講壇社会学は、今日、永く続く危機のはじめの段階に入っている」との認識から叙述がなされている。そして Gouldner がいうところの「危機ということの中心的な意味は……危機状況にある体系が、比較的すみやかに、それまでとはまったく違ったものになるであろうという意味」が含ま

さらされており、「全体の性質を基本的に変容させる、より永続的な変化の可能性のことであり」とされている。そして、こうした危機の状態にある体系にかかわって、Gouldner は機能主義理論、なかんずく Talcott Parsons の理論のあり方を批判の対象としたのである。

例えば、「社会問題が基礎的な所有制度に根ざしているとは考えず、社会問題が所有制度を脅かすものにならないように、その市場制度の社会を分裂させる影響力を調整し、分配装置を調整せねばならないとする社会の立場、または社会の中の諸集団の立場に、機能主義社会学は対応している」。「社会学的機能主義は、道徳的価値の役割や、より一般的には道徳の重要性を強調するが、それは、しばしば現代の社会問題の所在を道徳体系の崩壊の中にみつけるようになる。たとえば、社会化の体系における欠陥によるため、とか、道徳規範に一致して行動するよう人びとを訓練することで失敗したため、とかのよう」にであると。そしてそれに対応して、現代資本主義国家の手段と技術の強調に、機能主義は伝統的な理論の強調点をかなりの程度内部的に手直ししながら、「国家目的そのもののために」積極的に順応しようとする現代の社会学を危機の段階にあるものとして看取したのが、Gouldner の基本的立場である。そしてこうした社会学の〈危機〉状況の責は偏に、第二次世界大戦後の Parsons 及 Parsons School の理論の伝統における重要な転向にある、とするのである。

こうした Gouldner の論点は、「今日、社会学は非常に国家の支持を受けている」が、初期の社会学—初期の機能主義は必ずしも国家目的にほとんど動員されていなかった、とする Gouldner の社会学史観に由来するものと考えてよいだろう。とすれば、こうした Gouldner の観点に対してわれわれは批判的にならざるをえないであろう。何故ならば、Gouldner 自身が

指摘するように、「機能主義者は、社会における秩序維持メカニズムは、それが〈自然に〉—コントの好きなほめことばのひとつであるが—働くときに、すなわち、合理的な計画や人為的な介入がないときに、もっともよく作用することを常に予期してきた」が、このことは社会問題を自由放任することによって、経済秩序維持メカニズムを作動させてきたのが近代資本主義国家であり、機能主義がそのものの目的に如何に機能し、貢献してきたかを想起するならば、Gouldner の論点の矛盾点が指摘されるのである。

故に、われわれは、近代国家の要請に対する組織的、技術的適応として August Comte 以降の社会学がその学問的性格を刻印してきていて、それが社会学をして学問としての貧しさを内在化させてきた、との基本的な認識の立場を確認すべきであろうと考える。

## (二)

では、今日の〈paradigm〉の革新のうねりは、こうした社会学の伝統的呪縛から解放されるものとしてありえるであろうか。〈paradigm〉の革新を喧伝する社会学者の多くが、機能主義理論の補整、再生を計ろうとしている現状から、われわれは機能主義理論の典型を、Talcott Parsons, *The Social System*, 1951., から概略しておこう。

およそあるひとつの社会が、さほどの混乱も示さず、ある一定の安定化を保持しえるためには、そこに成り立つ一連の価値体系が人びとの間にほぼ共有され、したがってまた、人びとの考え方や行為—行動の様式がほぼ統一化ないし標準化されていることが必要だとする議論にはさほどの異論はないであろう。これに反して、人びとのもつ価値観があまりにも多極化せられ、さらにはまた、人びとの多くが、既存の価値体系や、これにもとづく社会の諸制度に満足

せず、さらに進んでより新たなものを目指して行動しようとする場合には、おのずからそこに、自明的にさまざまな逸脱行動が起こり、これによって社会の安定化が多かれ少なかれ阻害され、支配秩序の装置体系が動揺をきたすことになるのは、あえてことわるまでもないところであろう。

ところで、このような問題との関係においてまずとり上げられてよいのは、Parsons の“Social System”論の立場である。その最も基本的立場は、19世紀に支配的な役割を演じた社会有機体論のそれとかなりの近似性を示しており、それによると、社会や集団を以てまとまったひとつの全体、換言すれば、一箇の社会体系を成すものとみなし、したがって、それを構成する各部分ないし各要素の間には、密接な相互依存の関係があり、もしその一部分に何等かの変化が起こると、おのずから同時に他の諸部分にも変化が生じ、これによって社会や集団は、一時、多少の動揺、混乱はあるにしても、やがて新しいレベルで安定化（均衡化）をとり戻す傾向がある、という事実を特に重視しようとするものであって、その意味でこの立場は社会的均衡理論とも称されている。

さてこのように、一箇の社会体系を構成する相互依存的要素として何を考えるかについては、もちろんそれぞれの論者によって異なり、例えば特に小集団を主たる研究対象として考える George C. Homans, *The Human Group*, 1950. の場合では、集団成員相互の間にみられる sentiment, interaction, activity の三要素と、これらの相互依存の関係からおのずとそこに生じてくる norm の要素をとりわけ重視しようとするのである。ところがこれと異なって Parsons の場合では、社会や集団のなかで、まず何よりもその成員たちに期待されるそれぞれの役割行為が、相互に密接な依存関係にあるものとされ

る。したがってこの場合、社会体系とは、より具体的には、一箇の役割体系を意味することになるが、しかし Parsons 自身がとりわけここで重視しているのは、まず第一に、人びとにおける動機づけの過程と、第二には、人間行為の選択の基準となる価値のパターン (pattern variable) である。

㊦ T. Parsons は、pattern variable 即ち具体的には五つの概念の組合せについて次のものを提示する。

- ① affectivity vs. affective neutrality
- ② self-orientation vs. collectivity-orientation
- ③ universalism vs. particularism
- ④ achievement vs. ascription
- ⑤ specificity vs. diffuseness

さらにはそれと緊密に相関する制度との両者であって、人びとがそうした価値のパターン、ないし制度に準拠して行為し、それから逸脱しないように動機づけられていく（——換言すれば、価値パターンが個人の意識の内部に内面化されていく、これを socialization と呼ぶ）ところにこそ、社会体系の均衡が維持されるし、かつまた社会体系は本来そうした傾向をもつものとされるのである。

Parsons の場合、このような一連の価値パターンが個人意識の内部に内面化せしめられていく、いわゆる socialization の過程を重視すると同時に、かりにもしそうした価値パターンからの甚だしい逸脱行動が行なわれるような場合、ただ単に法の処罰だけにとどまらず、世論の批判ないし仲間の批判を通じて、何等かの sanction を伴う社会統制 (social control) が力に加えられ、かくして社会の安定化、均衡化が多かれ少なかれ維持されていく傾向があるとされるのである。ところでほぼこのように社会の均衡化への傾向を強調する“Social System”論の立場は、かつて Walter B. Cannon, *The wisdom*

of the body, 1932., が唱えた生理学説と一脈共通した部分があると考えられ、事実また Parsons 自身も自らの論文のなかで、この学説の与える示唆に論及しているほどである。すなわち Cannon によると、人間肉体のもつ生理的諸条件は、肉体内外の影響に対して自動的に調整され、つねにある一定の標準状態を維持しようとする傾向があるとされるのであって、彼はこのような働きを「恒常性保持機能(homeostasis)」と名づけたのであった。ところで人間の肉体にそのような働きが有するということは一面の真理を含むものと考えられるかも知れず、かりにもしそうだとすれば、なるほどそれは、Cannon の著書の題名が物語るように、まさに「肉体の知恵」を意味するとも言えるかも知れない。しかしながら、果たしてそのような homeostasis の働きが有するとしても、もし人間関係の一部にあまりにも大きな変化が一挙にして導入されるような場合、他の部分はよくこれと均衡を保って、つねにその恒常性を保持することが可能であるかどうか、という問題になると、当然われわれはそこに多くの疑問を寄せざるをえないものである。

ところで、あたかも Cannon の学説と同じように、Parsons の“Social System”論についても、数々の異論が提起されてくるはずであり、概してそれが、社会学的思考のなかにより顕著な保守主義的傾向をもたらすものとする批判を招いているのも、必ずしも故なきことではないのである。いわんやこれを社会の〈現実〉の動きについてみても、Parsons のいわゆる socialization の過程、ないし社会統制を通じて、社会は確かに均衡化・安定化を保つひとつの傾向をもつとしても、socialization の過程が順調に行なわれず、さまざまな逸脱行動が社会の各方面にわたって烈しく且つ広汎に生じた場合、社会統制的作用によってそれが抑圧され、必ず常に

均衡の調和をとり戻しえるという保証はどこにもないはずだと言わなければならないであろう。

試みにここで、現代日本の社会状況を概観してみると、価値観の多極化という一点を中心として考えても、共有せられるべきはずの価値や規範が見失われてしまい、その結果として、“Social System”論の主張するところとはむしろ逆に、その安定化が阻害され、そこにある種の混乱状態を露呈するに至っている事實はまず否定し難いところであり、なかなづくモラルの荒廃に特徴づけられた今日の世相を一瞥するとき、その感はいっそう掩い難いものがあると言えてよいであろう。

- ㊤ 社会や集団をもって一箇の役割体系を成すものとみる T. Parsons の立場に対して、Ralf Dahrendorf, *Homo Sociologicus*, 1959., のなかで、ほぼ次のようなより基本的な批判が提起されていることは注目されてよいであろう。すなわちそれによると、Homo Sociologicus とは、個人と社会との接点に存在し、社会的に前もって形成された役割と担い手としての人間を意味する。個人はつまりは彼の担うさまざまな役割のことを意味するが、しかもそれらの役割はそれ自体社会の腹立しい(忌ましい)事実なのである(die ärgerliche Tatsache der Gesellschaft)。もともと社会的地位というのは、社会の個人への危険な贈り物(ein Danaergeschenk der Gesellschaft——ギリシャ人の贈り物、トロイを滅亡にみちびいた木馬のことをいう——)なのである。というのは、すべての社会的地位は役割を伴ない、したがって地位の担い手の行動に対する一組の期待を伴なうからである。すなわち個人は特定の役割を担うことによって、おのずから彼の外側に存する社会の諸規定を自らのなかに受容し、これを自己の行動を規定する根拠とすることにおいて、社会と媒介され、Homo Sociologicus として再生することになる。このようにして Homo Sociologicus となった人間は、いわば無防備のままで社会の諸規

則にさらされることとならざるをえない。もしそうだとすれば、「役割に規定されるが故にまさに非自由な人間」と、他方「役割から解放されるが故に自由で自律的な人間」、換言すれば、“totaler Mensch”との間に有するパラドックスの Positionen が重大な Positionen となってくるはずであり、社会学がひたすらに科学性のみを重視する無批判的な Dogmatismus に陥るべきでないとするれば、二重化された人間 (gedoppelte Mensch) に関する道德的問題を決して視野から見失わないようにする試みが必要である、とする Dahrendorf の問いに答えられない Parsons の理論の欠陥はより明確である。

但し、Dahrendorf も、社会関係が重層的に形成され、全社会的<sup>ゲゼルシャフトリヒ</sup>生活過程における意識からの独立の度合い、安定性などによってさまざまな社会関係の存在を把握する視点を欠き、「相互の役割期待の関係」というフレームで把握し、ひとりひとりの主体的、意識的な行為として説明する伝統的な社会学的な社会関係論の呪縛からは脱し切れないでいる点への批判はきちんとしておかねばならない。

人間の生き方に関する上述した Dahrendorf の基本的な問いを全くといってよいほどに欠如する Parsons の立場は、先述した G. C. Homans の立場についてもほぼ共通するものとみてよいであろう。

Homans は、社会体系に関して時の経過とともに internal system の evolution へと論及する場合、特に重視しようとするのは、その集団独自の norm がおのずからそこに成り立ってくる事実であり、すなわちそれは集団の成員である限り、このような場合にはすべからくこのように行動すべきだと考える共通の観念を意味するのであり、そこからの逸脱は仲間の批判を招くが故に自己にとってマイナスとなることを恐れ、自らそこに social control が働き、かくて集団の均衡化が維持されることになるという事実をとりわけ強調しようとするのである。われわれはこうした均衡理論についても、原理的に

は Parsons 理論に対して寄せると同じような疑問を提起せざるをえないものであって、いずれにせよこれらの “Social System” 論の立場は、多くの矛盾やひずみを露呈する現代日本社会の分析にとって十分の説得力をもちえないことを指摘しなければならぬと考えるものである。

### (三)

上述した T. Parsons らに代表される現代の社会学は、その学問的方法の立場として、基本的には、社会現象 = 社会問題をその現象形態において、即、対象とし、これら社会現象を各「個人」の内在化された性格においてのみ問題とされ、説明され、他の社会現象との関連性も、現存社会体制秩序の限定性のもとでのみ取り扱われ、しかも個人的経験レベルにおいて、主観的な感性認識にもとづいて単に記述されるにすぎない。「相互関連的な統一体である現実への社会現象の生きた実態をとらえる」(T. Parsons) ための社会学理論の体系化構築への努力を「構造機能分析」あるいは「社会学的機能主義」と称しようとも、A. Comte 以来の社会学が内包する学問的性格の弱点はなんら克服されているとは言い難いのである。

すなわち、これら社会学は、その基本的立場として、諸要素間の比較的恒常的な関連性を「構造」として設定し、「構造」に対する可変的要素の働きかけを「機能」としてとらえ、恒常性を保持すべき「構造」の機能的メカニズムが問われるにすぎないのである。つまりこの立場にあって、「機能」は「構造」をして「構造」たらしめる「構造」維持の「機能」として問題にされるのみであって、したがって、諸要素は、「構造」を維持する「機能」として働く時のみその意義をもつものとして把握されるのである。そして「具体的な社会体系」(T. Parsons) の分析においては、役割の成立が行為理論との

関連において個人間の「期待の相互補完性」から説明されながらも、究極的には、社会体系の目標がア・プリオリに設定され、その目標にもとづいて諸「個人」に役割が配分されるという説明となつてあらわれているのである。

客観的存在としての社会は、歴史的存在である。この点への認識を著しく欠いているのが、今日の社会学のあり様と言つてよいだろう。「社会学的機能主義」は諸要素間の相互関連性を問題とするのみで、存在としての社会がもっている歴史的、具体的内容を捨象してしまっている。とすれば、社会学は、社会を客観的存在としてとらえられないばかりか、歴史的存在としてもとらえられないこととなるのは自明的なことと言わなければならない。客観的存在としての、また、歴史的存在としての社会を把握しえない社会学が、近代資本主義「社会」を、近代資本主義「国家」との相互連関性において把握されえないのも至極当然のこととしなければならないのだろう。しかもその限りでは、媒介としての近代的「市民(個人)」が問題とされるはずもない。とすれば、必然的に、社会学が、歴史的、具体的内容を欠いた抽象的な「社会」概念を振り撒かざるをえないのも故なしとはしない。しかしこの点にこそ社会学の学問としての〈危機〉が存していると考えるのである。すなわち抽象的な、意味のない「社会」概念を振り撒くことは、その一方で実体化しつつより強化化する現代国家の支配秩序の機構にビルト・インされることに社会学は学問的に機能していることに他ならないからである。

こうした認識を欠いていることが、本来的な社会学の〈危機〉であり、それとは無関係な事柄をあげつらねてあれこれと〈危機〉を叫び、〈paradigm〉の革新を喧伝したところで、社会学の学問的存立の〈危機〉を深めこそすれ、学問としての再生などおぼつくはずもないと言わ

ざるをえない。

例えば、「自省的機能主義」の立場に自ら立つと宣し、社会学における自己組織の〈paradigm〉を、「自己組織性」の社会理論として定置しようとする今田高俊<sup>(注)</sup>は、著書『自己組織性—社会理論の復活』、1986、において、「システムが環境と相互作用する中で、自らの構造を変化させ新たな秩序形成とする性質を総称」し、それを「自己組織性」と呼び、「活力ある安定」という時代精神（——この精神こそが、現在の国家精神そのものであるにもかかわらず——）に見合った社会理論構築に向けて、「あくまで人間一人一人の営みが社会をつくり変えていくのである」とのイメージを振り撒こうとし、「社会が変化や変動の主語なのではなく、個々の人間が主語であり、社会はあくまで目的語にすぎない」と、シュガー・コートされた社会理論を提唱しているのである。具体的、歴史的内容を捨象された、抽象化された「社会」理論への努力を「社会学」の社会理論とする限り、それは学問としての「社会学の〈危機〉」を深化させると同時に、市民社会をより深刻な危機状況に墜さないではおかないであろう。

⑩ 本稿、脱稿後、今田高俊「自省的機能主義の基礎」（日本社会学会『社会学評論』147—Vol. 37, No. 3—1986）を読解する機会を得た。「機能主義の弱点をシステム科学によって補強しようと努めてきた」のが、「自省的」の意味するものであるとするならば、その社会理論が果たしうる社会的機能はおのずから明らかであろう。

支配的なコミットメントへの配慮のみが優先した〈paradigm〉の革新を、社会学として認めるのであろうか。それはむしろ、国家の要請に対する新しい講壇社会学の適応でしかないのではないか。

その意味からして、今田高俊が、「現在、社会科学は言語喪失の状態に陥っている」と言う

が、社会科学が言語喪失の状態に陥っていると  
はどういうことか？ また、本当にそうなのだ  
ろうか？ 語るべき言語をもたない社会学者自  
身がむしろ問題なのではないのか。つまり、  
〈現実<sup>リアリティ</sup>〉のなかに生きない社会学者の社会理論  
ほど虚しいものはないはずである。そうした社  
会理論の蓄積は、逆に、社会学の〈危機〉をよ  
り深化させるものでしかないことに、社会学者  
自身がより自覚的な覚醒への努力において、明  
示的な緊急の課題とされるべきであろう。

(未完)

[1986.11.1：稿]

〔参考文献〕

- ・ Robert K. Merton, *Social Theory and Social Structure*, 1957. (森東吾他訳『社会理論と社会

構造』みすゞ書房, 1961年)

- ・ Thomas S. Kuhn, *The Structure of Scientific Revolutions*, 1962. (中山茂訳『科学革命の構造』みすゞ書房, 1971年)
- ・ Alvin W. Gouldner, *The Coming Crisis of Western Sociology*, 1970. (岡田直之他訳『社会学の再生を求めて』新曜社, 1974年)
- ・ Talcott Parsons, *The Social System*, 1951. (佐藤勉訳『社会体系論』青木書店, 1974年)
- ・ George C. Homans, *The Human Group*, 1950.
- ・ Ralf Dahrendorf, *Homo Sociologicus*, 1959. (橋本和幸訳『ホモ・ソシオロジクスー役割と自由』ミネルヴァ書房, 1973年)
- ・ 今田高俊『自己組織性—社会理論の復活』創文社, 1986年
- ・ 『現代社会学』21・特集「パラダイムの革新と古典の解説」アカデミア出版会, 1986年

(つつみ しろ, 本学助教授)